

テイマーの苦悩と再生への道程

— Iris Murdoch: *The Book and the Brotherhood* より —

杉浦千秋

序

イギリスを代表する女性作家アイリス・マードック (Iris Murdoch, 1919-99) は第二次世界大戦後オックスフォード大学の道徳哲学教師であったが、1954年 *Under the Net* を出版して小説家としても歩み始める。しばらくは大学教師と作家を両立させるが、1963年職を辞して創作活動に専念する。晩年アルツハイマー病に侵されて79歳で亡くなるまでに、二十六冊の小説の他に数編の詩や戯曲、加えて幾冊かの哲学書も著す多作な作家であった。哲学教師という経歴や登場人物たちの哲学的議論から哲学の小説への影響を問われるたびに「私の小説は哲学的小説ではない。しかし道徳的な問題は重要だと考えている」(Meyers, 225) と答えている。1962年のハロルド・ホブソン (Harold Hobson) のインタビューでは学者よりも小説家であることに価値があるのかと問われて、小説の影響力について次のように語っている。

In altering people's sensibility, altering the kind of light in which they see the world. Novelists are partly symptoms and partly causes. One can see these changes of light more dramatically perhaps in other arts — in painting, for example. But literature is the strongest, and in my view the most important, of the arts because it's made of words — and words are connected with our highest rational activities. (Hobson, 1-2)

マードックはこのように小説家は、人びとが世の中を見る観点を変えること

に少なからず影響を及ぼすと考えている。さらに彼女の哲学観や文学観をまとめた *Metaphysics as a Guide to Morals* (1992) には次のような一文で小説への思いが記されている。

Good novels concern the fight between good and evil and the pilgrimage from appearance to reality. They expose vanity and inculcate humility. They are amazingly moral. (Murdoch, *Metaphysics* 97)

このように「良い小説は驚くほど道徳的である」と述べ、そのためにも小説の責任は真実を語ることだと主張する。複数のインタビューで「小説家はモラリストあり教師でもあるべきか」と尋ねられると「モラリストではあるべきだが教師だとどことなく説教的な調子に感じる。価値観を表現する小説家はモラリストであるべきだ」(Meyers, 226-7) と答えている。

マードックが考える道徳の中心概念は「個人」であり、この個人は愛によって理解しうるものであり「汝、それゆえ完全であれ」(Murdoch, *Sovereignty* 29) という命令の光において把握されるものである。愛によって理解できる個人がより善き行いをするを目的とするとき、そこには様々な葛藤が生じる。しかしそうした葛藤の場こそが我われの生きている社会であり、葛藤の先に「善」があると考えから、マードックは小説で愛を求める登場人物たちを生き活きと描いた。

本論で取り上げるマードック後期の長編小説 *The Book and the Brotherhood* (1987) は、タイトルから想像できるように完成が待たれる本をめぐる男性たちの長きにわたる絆が描かれる。彼女の小説についてはナレーターや主たる登場人物の多くが男性であり、彼らの性愛、絆、葛藤、人生観など題材の多くは男性社会におけるものである。そのため何か特別な理由があるのかと問われるたびに彼女は “I identify with men more than women.” (Bellamy, 48) と答える。マードックが創作を始めた時代は、現実の社会に存在する多くの出来事は女性よりも男性に属していることが通常だと考えられており、また社会的に影響を持つ小説を書くなら男性を描いた方がよりその力を発揮できると考えて

いた。(Biles, 61) しかしだからといって男性が優れていて、女性が劣っていると考えたのではない。彼女の女性観については本論で後述する。物語では本を書こうとする大学時代の仲間を三十年の長きにわたって数人の男女が経済的に支援を続けるが、本の上梓の最後の一年間を彼らの生き方が変化する出来事とともに描いている。壮大な本（内容は明らかにされていない）の完成を待つ物語の中で、女子学生テイマーのエピソードは小さな出来事かもしれないが、支援者たちの生き方を直接的、間接的に変える重要な役割を持っていると考えられる。

本論ではその若いテイマーの偶然の妊娠、中絶後の苦悩と再生という出来事に注目して、マードックの道德観を視座にテイマーの苦悩と再生の道程を考察するものである。考察に当たっては、I節でプラトンの『饗宴』からソクラテスと女神官ディオティマとのエロスに関する問答を参考とし、II節ではテイマー再生において見られるマードックの救済者としての顔を検証する。続いてIII節ではテイマーと母親ヴァイオレットとの葛藤から母性を検証して論を進めることとする。

I テイマーの苦悩とディオティマのエロスの階段

テイマーは本の完成を支援する仲間たちから清純無垢な妹あるいは娘のように可愛がられている女子大生である。母親は支援者のリーダー格であるジェラードの従妹ヴァイオレットだが「金が無かったからテイマーを産んだ」と口癖のように言い、非嫡出子のテイマーを悲しませているうえ、生活が破綻し娘の学費が払えないためテイマーを退学に追い込んでいる。支援者仲間の一人ダンカンの妻ジーンは、本の執筆者であるクリモンドと二度までも愛人関係に陥るが、二度とも夫のもとに帰る。しかしこの二度目のダンカン・ジーン夫婦の危機がテイマーの人生を大きく変えることになる。ジェラードの依頼でダンカンの様子を見に行ったテイマーは同情からダンカンと性的関係を持ち、思いがけず妊娠する。悩んだ末の中絶で激しい後悔に襲われるテイマーだが、第三者の助けもあってやがて立ち直り、苦しみの中から再生するという顛末である。

マードックはこれまでも作品中に中絶する女性を登場させている。アンドリュー・ウィルソン (Andrew N. Wilson) の伝記 *Iris Murdoch as I Knew Her* (2003) の一節を引用する。

Abortion crops up quite often in the novels — notably in *A Severed Head*. ‘You don’t take into account the *regret*, the terrible *regret* a woman might feel who had done this thing,’ IM [Iris Murdoch] once said in my hearing, to a woman defending the right to choose to terminate a life in her womb. (Wilson, 15)

彼女の中期までの作品ではこのようにプロチョイスには距離を置いている。例えば引用文中の *Severed Head* (1961) では、主人公のマーチンと不倫関係にあったジョージが秘密裏に中絶をして、後に自殺未遂を企てる。しかし *The Book and the Brotherhood* ではテイマーに中絶を選択させて、後悔に苦しむもののこれまでとは違ってその状態から立ち直る過程を描いている。イギリスにおける妊娠中絶の合法化は1967年なのでテイマーの中絶は合法である。1961年出版の *A Severed Head* のジョージと1987年に書かれたこの作品のテイマーの場合とは社会状況の変化という背景はある。

さらに妊娠中絶に対するマードックの立場を論じる上で、彼女のジェンダー観、フェミニズム観に言及する必要があるかと思われる。1976年の Michael O. Bellamy との対談で、マードックは以下のように述べている。

I’m not interested in women’s problems as such, though I’m a great supporter of women’s liberation — particularly education for women — but in aid of getting women to join the human race, not in aid of making any kind of feminine contribution to the world. I think there’s a kind of human contribution, but I don’t think there’s a feminine contribution. (Bellamy, 48)

「女性作家」と一括りにされることを嫌ったマードックは女性であることよりも常に一人の人間であることを強調する。そのため「ウーマン・リブの支持

者であり、とりわけ平等な教育の解放には熱心である」と断りながらも、女性のために寄与する問題や女性の視点に立つ主張には関心が無いという。さらにウーマン・リブの分離主義には反対で “to be equal, to be ordinary, to join the human race” (Chevalier, 83) と、インタビューでも頻繁に答えている。こうした彼女の姿勢を鑑みれば中絶をモラリストの立場で考えてはいてもジェンダーの問題とは捉えなかつたはずである。たとえ合法であったとしても、小説の中で中絶を実行して嘆き苦しむ女性を描き、それに理解を示し支えてくれる男性を登場させていないことが彼女の意思表示だと思われる。しかし *The Book and the Brotherhood* では悲嘆の淵から再生を果たすテイマーの姿が描かれるのである。

タミー・グリムショウ (Tammy Grimshaw) はテイマーの初めての性体験、ダンカンへの愛と妊娠の過程をプラトンの『饗宴』 (*Symposium*) におけるソクラテスが語る女神官ディオティマの話になぞらえた。

Tamar's spiritual ascent resembles that which Diotima describes in Plato's *Symposium*. Diotima's account of love is relevant to a reading of Murdoch's fiction because this Platonic account of sexual love parallels her own view that the transformation of Eros through the appreciation of beauty enables one's spiritual pilgrimage. (Grimshaw, 179)

『饗宴』の中ではソクラテスが列席者に女神官ディオティマとのエロスに関する問答を語る形式だが、ディオティマは架空の人物なのでこのエロスの話はプラトンの考えであり、プラトニストのマードックが『饗宴』の影響を受ける可能性は大きい。またテイマーという名前もディオティマに依拠しているのではないかと考えられる。ディオティマは愛が肉体の美から始まって段階的に高められて最終的には「愛とは善きものの永久の所有へ向けられたもの」(久保訳、115) となることを説く。グリムショウはそこにマードックの小説で描かれる性愛との類似性を見出ししているのである。テイマーは大学生になって二人の学生と肉体関係を経験したが、それは愛が介在するものではなく、その体

験がどんなものであるかを確認するものであったという。この段階では善へとつながるパートナーの美を評価したというよりも、テイマーは男性との性行為の肉体的な様相を知りたいという興味本位だった。これはエロスの低位の特徴となる。しかしマードックが *The Fire and the Sun: Why Plato Banished the Artists* (1977) の中で次のように指摘していることをグリムショウは明らかにしている。

Yet, as Murdoch points out, “carnal love teaches that what we want is always ‘beyond’, and it gives us an energy which can be transformed into creative virtue”. Tamar likewise uses her experiences of carnal love as a starting point for her spiritual pilgrimage. (Grimshaw, 180)

マードックの世俗的な愛についての指摘を受けて、グリムショウはテイマーにとって学生との性体験は今後歩むであろう精神の成長過程の出発点だと述べているのである。

テイマーはジェラードの依頼を受けてダンカンばかりか妻ジーンのもとへも赴いている。ジーンの変わらない肉体の美しさを認める場面では、マードックは二人をバイセクシュアル性向の人物として描くが、テイマーが両性の美を評価するのは「知恵」を求めているからであり、彼女が求めるのは「善」であるとグリムショウは述べる。(Grimshaw, 180) バイセクシュアルの描写についてはマードックのジェンダーフリーの観点から、そして彼女の道徳観からも不自然ではないが、ディオティマのエロスの階段との関わりはどうであるのか。プラトンの道徳主義に「善なるものは真なるもの」という前提があるが、世の中の真理を求めることが知だといえるので、知を求めることは善を求めることと同じだと考える。とすれば「善きもの」を求める愛の階段上にあることになる。

さらにマードックがジーンとテイマーの間に性のエネルギーを感じたクリモンドの怒りを描いた場面では、単に女性同士の性愛にクリモンドが嫌悪感を示しただけではないだろう。性のエネルギーが善へ近づく方法として用いられ

ているというグリムショウの指摘を妥当だと思うので、クリモンドの怒りはジーンがダンカンの許へ帰ろうとしているのではないかという疑いを持ったが故のことだと考えられる。何故なら大好きなジーンを訪ねたテイマーはジーンの希望でお互いに洋服を試着するという打ち解けた行為にでるが、そこには夫婦が元の鞆におさまってほしいというテイマーの訪問の本来の目的である善なる目的があるからである。

善なる目的はダンカン訪問の場合も同じである。しかしテイマーはそこで三十歳以上も年長で、負け犬のように落ち込むダンカンに外面的な美しさよりも魂の質を認めた。言い換えれば本質的な美を理解したうえでダンカンと性関係を結んだ。その時ダンカンに愛を感じ、彼を慰めたことへの充実感で満たされるのである。ディオティマは「人は精神的発展をする途中で肉体的な美しさは重要ではないことを認識するようになる」(久保、124)と説明している。テイマーはダンカンの許を訪れるうちに、ダンカンへの眼差しが変化することに気づく。テキストを引用する。

Tamar saw, as before, his stout bulk, his flushed plump wrinkled face, but she saw in the same look his big animal head with its flowing mane, his huge nostrils like a horse, his sad melancholy of a beast who has been a prince ... (187)

妻を仲間に寝取られた情けない五十男がテイマーには王子の化身のように映る。つまり精神的発展の途上にあるテイマーには外見の美は重要でなくなっているのである。さらにマードックは『火と太陽 — なぜプラトンは芸術家を追放したか』(*The Fire and the Sun: Why Plato Banished the Artists*, 1977)の中で「利己主義を克服することは自ずとさらに道徳的になることである…美を正しく理解することは、欲望を変容することによって喜びを感じることである」(川西訳、75)と述べる。テキストに“Her love and her pity for him merged into a swift dizzy physical joy of self-giving ...” (214)とあるように、テイマーはそのとき美を正しく理解することを通して自己犠牲を伴う肉体的な喜びを経験したのである。

しかしその後テイマーには妊娠という思いがけない結果が待っていた。ディオティマは「愛の目指すものは美しい者の中に生殖し生産することで、美しい者の調和のもとでこそ起こる懐胎と出産は減ぶべき者のうちにある減びざるもの」(久保、116)だと説く。テイマーは利己心を捨ててダンカンとジーンのために、そして自分の妊娠を実現させる道はないものかと悩む。テキストを引用する。

At the same time she found herself trying to continue her dream of somehow ‘making it all good’, for *them*, and for her. Was there not still a way, was there not always a way, to be innocent and unselfish? (323)

これに対してグリムショウはマードックの考えを以下のように紹介している。

Her [Tamar] actions demonstrate that she is still engaging in the outward-looking, attentive discipline that Murdoch believed was so essential to one’s spiritual and moral life. (Grimshaw, 181)

この段階では、マードックはテイマーをダンカンとジーンに対して「注視」の眼差しを持って悩んでいる状態として描いていると言える。

ここで用いた「注視」(attention)はマードックにとって道徳を語るうえで欠くことのできない言葉である。これは個人的な実在へ向けられた正しい愛の眼差しの観念を表現するために用いられる語であるが、彼女の著書 *The Sovereignty of Good* (1970) からの説明を引用する。

I have used the word ‘attention’, which I borrow from Simone Weil, to express the idea of a just and loving gaze directed upon an individual reality. I believe this to be the characteristic and proper mark of the active moral agent. (Murdoch, *Sovereignty* 33)

フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil, 1909-43) の倫理学の著作はマードックのものの方に見方に大きな影響を与えた。その「注視」についてシェリル・ボウヴ (Sheryl K. Bove) は著書 *Understanding Iris Murdoch* (1993) の中で、マードックは道徳の向上は困難で、善の実現も不可能に近いことを信じているけれども、彼女のものの見方は楽観主義であることを否定できないとしながら次のように述べている。

Any attention which moves one in the direction of awareness of others also moves one away from self and brings about moral improvement. (Bove, 17)

「注視」の概念は、常々小説には真実を描く責任がある、現実を正確に描写することが有徳であると語るマードックの創作姿勢の根幹をなすと思われる。しかしテイマーのお腹の子どもにはどうか。II・III節で言及したい。ディオティマのエロスの階段を順調に登って善に近づいたかに見えたが、結局は出産に至らなかったの、減すべき者のうちにある減びざるものの産出ができなかったのである。そして中絶後の後悔に懊悩することになる。

テイマーは世馴れたりリー (クリモンドの支援仲間の恋人) に相談した結果中絶を実行する。ディオティマによれば「男性は限らない「知恵の愛」の中で豊富な美、広範な思考や理性などを産みだす」(久保、209) という。「肉体上の生産欲」(fertile in body) の代わりに「魂における生産欲」(fertile in soul) である。グリムショウの分析では、テイマーはディオティマが語る男性のように「魂における生産欲」を選択した。マードックは肉体的な妊娠を続行するよりも知的で精神的な魂の産出を願うテイマーを描くことで、母体という女性の肉体的限界を超越したものを描くことを意図しているとグリムショウは述べる。(Grimshaw, 182) それゆえ彼女は「テイマーは女性ではない」と主張するが、同様にエリザベス・ディップル (Elizabeth Dipple) のテイマーは物語の中で男性の役割を持たされている (Grimshaw, 182) という意見を紹介している。

テイマーが母親らしくないヴァイオレットへの反発や自身の出生への恨みから妊娠を恐れ呪っていることは確かである。しかし「魂における生産欲」は生

物学的に男性でありたい欲求ではなく、母親とは違う女性になるための道を選択する、つまり教育を受けることで母親とは異なる人生を選択したいというテイマーの願望である。今ここで妊娠、出産すれば憎んでいる母親と同じではないか、それだけは避けたいのである。母親とは違う人生にするためには大学を続けて仕事に就くことが何より重要だと考えているのであって、それが「女性ではない」ということであれば、女子教育の重要性を主張するマードックの姿勢に反してしまう。ジェラードの義兄ギデオンがテイマー母娘を経済的に引き受けて学費も援助するため大学に復帰することになる。テイマーは母性よりも知恵を愛することを選んだのである。しかし知恵を愛することがすなわち男性の本性だと決めつけるのではマードックらしくないことは既に述べた。彼女がこれまでに男女の差異を言い立てるのではなく「一人の人間として」社会に参加することを重視していることや女性教育の重要性に関する発言をしてきていることはすでに確認している。とすればテイマーに負わせた重要な役割として自立した女性、つまり自立した人間として再生することを期待したのである。

II テイマーの再生：マードックの救済者としての顔

前節でマードックはテイマーに「自立した人間への再生」を期待したと述べたが、本節では彼女の再生に大きな役割を果たしたマックアリスター牧師の存在を検証するとともに、再生に至るテイマーを検証する。

ロブ・ハーディ (Rob Hardy) はマードック小説における ‘healer’ (救済者) に関する論文で、テイマーのエピソードではマックアリスター牧師が救済者としての役割を負っているとの見解を述べる。まず冒頭では以下のように我われに問いかけている。

I [Rob Hardy] will ask if Iris Murdoch’s narratives of suffering and healing might justifiably make us think of Murdoch as a healer of the soul as much as a moralist. I will consider the narratives of Tamar, a young woman hideously tortured by remorse after the abortion of her baby in *The Book and the Brotherhood* (1987) ... (Hardy, 43)

モラリストであるマードックは救済者でもあるのだろうか。マックアリスター牧師が救済者としてテイマーを苦悩からの脱出を助けたのであるが、マックアリスターは牧師であるにもかかわらず神やキリストの神性を信じてはいなくて、祈りや秘教的救世主としてのキリストを信じるという変わり者として描かれている。テイマーは牧師の勧めに従って洗礼と堅信を受けたばかりか、中絶した子の葬儀とも言える儀式を秘密裏に行なってもらった。牧師はある種の悪魔払いの儀式と考えていたが、テイマーにとっては再生への転機となった儀式である。ハーディはテイマーのエピソードを次のように分析している。

Tamar's narrative might be a case study of just such a patient, with Murdoch the moralist waging an internal battle with Murdoch the healer. This internal battle is best observed in the poignant description of the funeral 'rite' for the vanished embryo: (Hardy, 48)

テイマーはこの秘儀に及んでやっと失った赤ん坊を「注視」できたと言えよう。芽生えた命を自らの意志で終わらせた罪が消えることはないが、マックアリスター牧師の儀式によって苦悩の果てに愛の眼差しを赤ん坊に向けることができ、テイマーに赦しの時が訪れたのである。モラリストマードックとしては中絶に対して厳しい扱いをするところであるが、救済者としてはテイマーの行為を赦している。中絶した女性が後悔と孤独の海に取り残されるのではなく、相談できる人物が一人ならずいること、常軌を逸していたとはいえ他者に結果を伝えられたこと、そして何よりも復学できたこと、これらはマードックが若い女性テイマーに人生の可能性を与えたことを意味していると筆者は理解する。プロチョイスに賛同しているわけではないが、それを選択した女性の前途が閉ざされないようにという応援であると思える。

続いてテイマーの苦悩とその解決に至る選択についてグリムショウが異なるいくつかの見解を紹介している。まずグリムショウ自身の意見である。

Physical desires are virtuously transformed as one pursues knowledge and

wisdom. As a result, the mortification of physical desires, as well as the failure to pursue intellectual endeavors, can damage one's spiritual growth. ...After her abortion, she continues to fail to progress on her moral and spiritual pilgrimage. This failure is not a result of the abortion itself. Rather, Tamar chooses to mortify her own flesh after the termination of her pregnancy. (Grimshaw, 184)

テイマーは子どもを殺したことで身の破滅を招くと信じ、善の追求から道を逸れて取り返しのつかない罪を犯したと思い込んでいた。さらにテイマーは中絶に加えてもう一つの問題に苦しんでいた。それは母親との生活を立て直すために大学を諦めたことである。知識・英知を求める場である大学生活を失ったことで、テイマーは進むべき道を見失っていたのである。次に紹介するピーター・コンラディ (Peter Conradi) によれば、マードックの哲学はどのような肉体的拒絶も必要としていないことを明言しており、マードックがテイマーで描いた肉体の苦行は逆に「精神の向上」に影響する、何故なら人は知識や学問を追求するとき、肉体的な欲求は有徳に変化させられるはずだというマードックの考えを述べる。そしてコンラディは「テイマーは利用された仲介者役を通して殉教者から荒れ狂う犠牲者へと発展する。しかしその後あまい気持ちでキリスト教へ転向して、天使のような人物になるのではなく、新しい非常に強い力を手にした」(Grimshaw, 184) と言っている。またディップルは「テイマーは新たに見出した力を得て彼女の性格は悪魔ようになった」(Grimshaw, 183) と述べている。さらにボウヴの「テイマーが力を入手したことは彼女の道徳性を傷つけ、善の追求と愛への可能性を妨げている」(Grimshaw, 185) との見解を紹介している。グリムショウ自身はボウヴの意見に賛成だとしている。また彼女によれば、マードックはテイマーの将来にわたる道徳上の歩みは曖昧さに満ちていることを暗示しているという。ブラザーフッドの仲間たちからも認められ、ダンカン・ジーン夫婦の仲介役も務めようと道徳的に向上してきたテイマーだが、終盤でテイマーにせつかく強められたジェンダーの自由度が成就できるかどうか、その可能性を不確実なものにしているというのがグリムショウの見解である。

テイマーが手にした新たな力は果たして不吉な力、悪の力なのだろうか。彼女の変わりようには入信を勧めたマックアリスター牧師自身も驚きを隠せず “He had not wanted to release his penitent from one demon to see her seized by another.” (510) と暗い気持ちになる。やはりディップルの言うようにテイマーは不吉な力、悪魔に捕えられたと読むべきだろうか。母親ヴァイオレットには非情なやり方だったかもしれないが、テイマーとしては何としても大学復帰の道を選択したかった。それなくしては自分の将来はない、さらに言えば母親との生活の展望も開けないわけである。大学復帰という知の追求はテイマーの精神的変化を助けるはずであるし、女子教育を重視しているマードックのジェンダー観を鑑みれば再生の選択肢として現状では最善だと言えよう。

グリムショウのテイマーの将来に関する見解でも述べられるように、マードック作品のエンディングは曖昧であると言われる。しかしそれはマードックが彼女の道徳観を読者に押し付けない、言い換えれば読者がどのように受け取っても良いということを作者が望んでいるからである。テイマーの将来についてグリムショウの見解は上記のとおりだが、筆者は母親を一時的に悲しませる選択ではあるが復学は正しい選択だと考える。母親ヴァイオレットとの確執問題はテイマーの苦悩と再生を語る上で、テイマー自身の母性の問題とともに母娘関係の問題についても検証する必要があると思われる。

Ⅲ 母性：母として、娘として

テイマーの偶然の妊娠による苦悩、再生の検証とともに、この中絶問題とは切り離せない母性についてはどのように扱われているかを考察したい。テイマーは中絶の後悔を経て、牧師の秘密の儀式を受け入れたことで彼女にとって注視すべき他者（実社会に存在はしていないがテイマーの体の中に存在した子）と向き合うことができた。彼女は母体となった自らの意思で子どもの生命を葬ったという罪の意識に苛まれる。母親ヴァイオレットと同じ轍を踏むことになる呪ったはずの子どもだが、テキストで次のように心情を吐露している。

Infinitely more important, more precious, more life-giving and life-saving, it seemed now, was the being of that miracle child, a blessing, a God-sent gift to Duncan, to herself, perhaps even to Jean. ... She and child setting out upon their happy free *good* life together. (346)

テイマーもできることなら子どもを産んで、神様の贈り物のような子どもが果たす役目もあったかもしれないと悲嘆にくれる。Ⅱ節で母親との現状に決別して復学するテイマーを紹介しているが、利己的とも映るテイマーは心のうちで誕生する可能性を持っていた命がもたらすかもしれない生活を想う、その想いこそ彼女の母性と言えよう。その母性を現実の中で発揮できたならヴァイオレットへの恨みも越えることができたかもしれない。

ガブリエル・グリフィン (Gabriele Griffin) がマードックの作品における母親不在について次のように述べている。

It is worth mentioning in the context that Murdoch's dissociation from the feminine in her writing finds its perhaps most interesting expression in her portrayal of mother-child relationships. Significantly, in the lives of Murdoch's fictional adults the mother as an important figure is mostly absent (her own mother is still alive) . (Griffin, 288)

The Book and the Brotherhood においても、中心的な登場人物であるジェラードと母親との関係よりも父親との確執が描かれる。家庭を支配していた母親の意見に抗しきれない父親は、ジェラードの留守中に彼が大切にしていた鸚鵡を処分してしまった。この一件で息子ジェラードは父親に裏切られたと思い、父親は妻に押し切られた自分を息子は許さないだろうと思いこむ。その状況下でジェラードは母親と姉に対してはそれほど気に留めなかったし期待もしていなかったこと、彼女たちへの愛情は絶対的価値、名誉、責任、真実に関わる問題ではないと回想している。(60) このように母親との関係の描写は希薄であるが、おそらく男性を登場人物の中心に据えるため、息子と母親との確執や葛藤

を描くことよりも、畢竟父親と息子の関係を描くことになる。

しかし *The Book and the Brotherhood* ではテイマー母娘に多くのページが割かれているのである。再びグリフィンを引用する。

The Book and the Brotherhood, for example, is full of failures of such bonding or female support. ... Tamar's mother Violet, an illegitimate child herself and full of resentment and bitterness, does all she can to destroy her daughter's happiness. (Griffin, 287)

自身も非嫡出子として生まれたヴァイオレットが娘も同じ身の上にしてしまったばかりか娘に退学を迫ることになる。ヴァイオレットを生活の破綻者で娘を守ってやれない母親として描くマードックの考えはどこにあるのか。I 節で述べたようにマードックは女性特有の問題に関心が無い。男女が同じ世界で生きることを望み、そのために必要な努力を惜しまず、女性の教育を重視する姿勢を取っているのだから、ヴァイオレットを厳しく描くことは頷ける。しかし母性についてはどうか。母と娘は経済的困窮から言い争いが絶えないが、ヴァイオレットの母親らしい心情を描写した部分をテキストから引用する。

Violet was pleased when she [Tamar] went to Oxford, but was envious, and jealous too ... Violet was also able to value her daughter's docility, her desire to please, her quiet acceptance of a very limited way of life. (106-7)

ヴァイオレットは大学で学び、ブラザーフッドの仲間たちからも可愛がられている娘テイマーに嫉妬しているとまで周りから言われているが、経済的な行き詰まりとともに娘から捨てられるのではないかという不安が彼女を頑なにさせ、さらに自暴自棄にさせている。物語終盤でテイマーはマックアリスター牧師とギデアンの計画による強引なやり方で母親を見捨てる。この冷やかな場面を目の当たりにして、牧師はみずから導いた懺悔者テイマーが母親と言う悪魔から解放されてもまた別の悪魔につかまるのではないかと救われない気持ちに

なった。しかし牧師は哀れなヴァイオレットをテイマーと二人で助けなくてはいけないと思いなおすのだった。(510) 一方見捨てられた形のヴァイオレットはテイマーや牧師たちに悪態をつきながらも次第に事態を現実のものと受け止め始める。娘の存在が必要であり頼っていた自分を認め、娘を失う寂寥感に襲われる。(515) 母親ヴァイオレットの心情を垣間見る描写を引用する。

She had not really lived, before, on pure unmixed resentment and remorse and hate, she had lived on Tamar, as a presence, as a vehicle, as something always expected and *looked forward to*. Through Tamar she had touched the world. (539)

若い娘は母親を捨てて自分の道を進むしか当面の解決はない。ギデオン達の援助にすぎることによって娘の将来が開けるならば、親としては自分の誇りや意地を捨てなくてはならないのである。このヴァイオレットのつぶやきの中に母親らしい気持が響く。親は子の将来を楽しみにするが重荷にはなりたくないのが親心だと思ふからである。マックアリスター牧師に悪魔や怪物女とまで思わせたヴァイオレットにも母親らしい心根の存在を知らせる場面でもある。そのヴァイオレットにも明るい兆しは用意されている。

His Master, handing back the problem to him, had informed him that his next task was Violet Hernshaw. (517)

マードックはマックアリスターを風変わりな牧師に描いているが、テイマーを救う役目を負わせたうえに、次はヴァイオレットの将来を託すのである。こうした牧師のような人物を配するところにもⅡ節で検証した救済者としてのマードックの一面が表れていると言えよう。

結び

本論では、本をめぐる仲間たちが五十歳代にさしかかり、それぞれの人生において「今こそ現実に目覚め、幸せになる時だった」(601)と思いなおしてい

る中で、若い女子大生ティマーを襲った偶然の妊娠、中絶の苦悩からの復活劇に注目し、彼女の苦悩と再生の道程の考察を試みた。物語の中ではサブプロットと言えるティマーのエピソードではあるが、マードックの道德観、女性観が十分に描かれている部分として興味深い。

I節ではプラトンの『饗宴』からソクラテスと女神官ディオティマとのエロスに関する問答を参考にしながら、ティマーの精神的な成長過程を検証した。ダンカンの内面の価値を認めて肉体的に結ばれ、その結果妊娠するのだが、これは美しき調和の結果だったはずである。しかし出産まで行きつけなかったことでエロスの階段の最後の段階、生殖の成就には至らなかった。しかしII節の苦悩からの再生で見たように復学するティマーはマードックの女性観、特に女子教育の重要性や一人の人間として社会に参加する姿勢を託されて蘇った。III節の母性の考察ではこれまでのマードック作品には珍しく母親との確執、葛藤に多くのページが割かれていることに注目した。ティマーとヴァイオレットの関係はこれまで希薄だった母親との葛藤を描いており、ティマーの苦悩と再生の道程を側面から検証するのに有用であったと思われる。周囲の援助を受けながらもティマーは苦しみの果てに再生の一步を踏み出すことができた。

1963年、マードックは44歳の時に「ティーンエイジャリズム」と題するエッセイを書いている。ここでは古い伝統や、習慣に捕らわれない若者たちの生き方、あるいは彼らの文化のことをティーンエイジャリズムと呼んでいるが、エッセイの中でマードックは「十代の若者たちの風俗や破天荒な行動の持つ活力は、何か新しいことを始める出発点になる」(室谷訳、28)と述べて、若者たちに明日の夢や希望のエネルギーを感じていたようである。こうした考えに反論があることや彼女自身若者たちに不快な側面があることも承知したうえで、若者たちへの期待感を持っているのである。*The Book and the Brotherhood*はこのエッセイから二十数年を経て書かれた作品であるが、若いティマーの将来がこの先も道德的にも精神的にも向上してほしいというマードックの願いが込められていると思われる。『饗宴』では我われ人間も動物もいずれは滅ぶべき命だが、次の世代に新しい命を作り出すことでその命は維持できるという思いをディオティマによって次のように語られる。「消え去る者

も古いゆく者も自分と同種の他の若者を後に残して行くことを意味する」。 (久保、119-120) マードック晩年のこの作品では、彼女が長年「一人の人間として世の中に参加する」女性として歩んだ道程が登場人物の若い女性に託されている。

参考文献一覧

一次資料

- Murdoch, Iris. *The Book and the Brotherhood*. 1987. London: Random House, 2003.
- . *Existentialists and Mystics Writings on Philosophy and Literature*. Conradi, Peter ed. New York: Penguin Books, 1999.
- . *Metaphysics as a Guide to Morals*. 1992. London: Random House, 2003.
- . *A Severed Head*. 1961. London: Random House, 2001.
- . *The Sovereignty of Good*. 1970. New York: Routledge, 2007.
- . *The Fire and the Sun, Why Plato banished the artists*. 1977. 川西瑛子訳『火と太陽—なぜプラトンは芸術家を追放したのか』公論社、1980

二次資料

- Antonaccio, Maria. *Picturing the Human: The Moral Thought of Iris Murdoch*. New York: Oxford UP, 2000.
- Bayley, John. *Elegy for Iris*. New York: Picador, 1999.
- . *Iris and Her Friends*. New York: Norton, 2000.
- Bellamy, Michael O. “An Interview with Iris Murdoch, 1977” Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Biles, Jack I. “An Interview with Iris Murdoch, 1978” Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch*. Columbia: South Carolina UP, 1993.
- Bloom, Harold, ed. *Modern Critical Views Iris Murdoch*. New York: Chelsea House, 1986.
- Caine, Barbara. *English Feminism 1780-1980*. Oxford: Oxford UP, 1997
- Chevalier, Jean-Louis. “Closing Debate, *Rencontres avec Iris Murdoch, 1978*” Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Conradi, Peter J. *Iris The Life of Iris Murdoch*. New York: Norton, 2001.
- Dipple, Elizabeth. “The Green Knight and Other Vagaries of the Spirit; or, Tricks and Images for the Human Soul; or, the Uses of the Imaginative Literature.” Antonaccio, Maria and William

- Schweiler. eds. *Iris Murdoch and the Search for Human Goodness*. Chicago: Chicago Press, 1996.
- Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Grimshaw, Tammy. *Sexuality, Gender, and Power in Iris Murdoch's Fiction*. Granbury: Associated University Press, 2005.
- Hardy, Rob. "Stories, Rituals and Healers in Iris Murdoch's Fiction" Row, Anne, and Avril Horner. eds. *Iris Murdoch and Morality*. New York: Palgrave Macmillan, 2010.
- Hobson, Harold. "Lunch with Iris Murdoch, 1962" Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Johnson, Deborah. "Iris Murdoch" Sue Roe. ed. *Key Women Writers*. Sussex: The Harvest Press, 1987.
- Meyers, Jeffrey. "Two Interviews with Iris Murdoch, 1990 & 1991" Dooley, Gillian ed. *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: South Carolina UP, 2003.
- Row, Anne, and Avril Horner. eds. *Iris Murdoch and Morality*. New York: Palgrave Macmillan, 2010.
- Wilson, Andrew N. *Iris Murdoch As I Knew Her*. London: Random house, 2003.
- 井内雄四郎 『アイリス・マードックの世界』 旺史社、2003
- イヴ・セジウィック 『男同士の絆』 (*Between Men: English Literature and MaleHomosocial Desire*)、上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001
- エイザ・ブイッグズ 『イングランド社会史』 (*A Social History of England*) 今井宏・中野春夫・中野香織訳、筑摩書房、2004
- 野口ゆり子 『ロレンスとマードック—父性的知と母性的愛』 彩流社、2004
- 平井杏子 『アイリス・マードック』 彩流社、1995
- プラトン 『饗宴』 久保勉訳、岩波書店、2000
- 室谷洋三編 『アイリス・マードックの随筆・対談集』 大学教育出版、1999